

日本IT書紀

025 太政官政表課

02 溟滓篇
卷之三 薄靡

佃均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第二十五

大政官政表課

一

大政奉還のあと、徳川慶喜はいったん水戸に退去した。さらにのち、一八六八年五月、家督を譲つた家達とともに現在の静岡市に居を移した。杉は慶喜とともに江戸を去り、駿府で徳川家教授方として仕えることになった。

一口に「江戸を去つて」と言つても、その作業は難儀を極めた。それは彰義隊の上野戦争による混乱のためばかりではない。開成所の教授たちは、彼らなりに官軍に抵抗した。抵抗というより、彼らの横暴に備えたというベきかもしれない。

抵抗とは、蔵書を持ち去ることであつた。建物としての開成所は官軍の没収するところであらうけれど、頭脳と知識が消滅すればただ木片の寄せ集めに過ぎない。同じことが昌平坂学問所でも起こつていた。ここでは儒家の頭目である林家が差配を振るつた。

その数は洋書八百三十三部二千三百冊、和書九十九部一

千二百冊に達していた。教授が陣頭に立つて書生や役夫を指揮し、江戸湾から水戸を経て駿府に移送された。輸送には幕府軍艦が使用された。慶応四年八月十九日に静岡県清水沖で座礁した咸臨丸がその役務を負つたやもしれぬ。

駿府に開設された府中学問所に収められた蔵書は、一九二五年（大正十五）、静岡県立葵文庫となり、こんにちには静岡県立中央図書館に「葵文庫」として所蔵されている。これにより駿府は一举に国内最大・最高の学府となつた。旧幕府の知識人、学問者、見識者がこの地に集約したのである。

同じ時期に中村敬輔（正直）も駿府の藩校で教授方を務めていた。慶応の遣英留学生使節団の取締役をめぐる人選でも、杉と中村は知己の關係にあつた。

ここで沼津奉行・阿部國之助、静岡奉行・中臺伸太郎に献策して一八六九年（明治二）に実施したのが、「駿河国入別調」である。

この調査に対して藩の重役は、

「封土人民奉還の後であるから、朝廷で為さらぬ事に当藩で斯様な調べをするのは宜く無い」と考えた。

江戸の新政権の中には、何かしら

「不穩の動き」

と口実をつけて前將軍徳川慶喜の処分をねらう一派があった。このため駿河藩当局は、徳川家に介入する口実を与えたくなかったたのであろう。一途に隠忍自重に努めていたことが分かる逸話でもある。

このために「駿河国人別調」の調査は静岡市と沼津、三島の一部でしか行われなかった。しかしその後、杉の功績は認められ、現在では「近代的統計手法を用いた国内初の人口統計」として記録に刻まれている。

幕藩体制下でも「人別調」は行われていたが、その主な目的は宗門のもとに藩民を集約し、年貢米を取り立てることであつて、職業・産業別、年齢別の人口や文盲率の把握などは対象の外にあつた。

だが杉は、日本が西欧列強に肩を並べていくには、産業の振興が不可欠であつて、そのためには何よりも現状の把握が前提になることを理解していた。おそらく杉は勝海舟、中村正直などにそのことを説いたに違いない。むしろ洋行の体験を持つ彼らはそのことを理解した。

ところで明治初年の中央政府の職制は、一八六八年四月二十七日に発せられた政体書に基づいている。

それには「天下の権力、総てこれを太政官に帰す」と定められていた。

一八七一年の九月、太政官は正院、左院、右院に分けら

れ、その下に八つの省が置かれた。正院は太政大臣・三条実美、左院は左大臣・島津久光、右院は右大臣・岩倉具視が統括した。太政官三院の職制が固まつたのは一八七三年である。五月二日の太政官職制改正がそれであつて、

正院ハ天皇陛下臨御シテ萬機ヲ総判シ太政大臣左右大臣之ヲ補弼シ参議之ヲ談判シテ庶政ヲ奨督スル所ナリ。内閣ハ天皇陛下参議ニ特任シテ諸立法ノ事及行政事務ノ當否ヲ談判セシメ凡百政ノ機軸タル所ナリ。

という定めが定まつた。

正院が権力を掌握するのである。

二

この当時、薩長土肥四藩の出身者でまともに政策を論じることができたのは大久保利通と木戸孝允ぐらいであつたらうといわれる。

武智瑞山、小松帯刀、久坂玄瑞、望月亀弥太、北添佶馬、高杉晋作、土方歳三、中岡慎太郎、大村益次郎、近藤長次郎、河合継之助——有為な人材が一八六四年から六九年のうちを去っている。さらに維新政府は阿部正弘、安藤

信正、小栗忠順など幕府における開国派および、徳川慶喜を筆頭に松平慶永、松平容保などを排斥した。

結果、正しく「西洋」を理解している者、あるいはこの国の将来に定見を持っている者はほとんどいなかった。経済政策、外交、産業・教育振興を企画立案する能吏は、旧幕府か他藩の士族にあらざる人材に頼るほかなかった。さらによれば、東アジアの端っこにポツンと浮かぶこの島国を、バイエルン公国になぞらえて論ずることができ、る者はごく小数に限られた。

太政官正院に「政表課」が設けられ、その長に杉亨二が任命されたのは一八七一年の十二月である。杉に与えられた肩書は「大主記」という時代がかった名称であって、こんにちいうところの局長に相当する。

もとより杉は一八七〇年七月、民部省が新設されたとき、勝海舟らの建策に基づいて新政府への出仕を命じられていたから、政表課の新設そのものが杉の建策であったと見ることができ、る。

「政表」とは今日の「統計」を意味するが、「Statistic」の訳語が存在しなかった。杉亨二という個人において、概念のみが存在した。「寸多・知寸・知久」という独自の表記を編み出すこともやった。

ようやく飛躍の機会を与えられた杉は、翌年四月に日本

初の年鑑『辛未政表』をまとめ、一八七二年一月二十九日に初めて全国の戸籍を調べた。戸籍上の総人口は三千三百一十一万八千二百五十五人だった。現在の「日本統計年鑑」の前身に当たるものである。また、一八七九年十二月三十一日現在で『甲州人別調』を実施して、人口を調査するのにかかる費用や手間などを算出した。

このときの調査では、二百人の調査員が家々を訪ねた。一日平均三十九軒の戸を叩き、「断じて年貢調べ、宗門調べなどではない」などと説きつつ聞き取りを行った。

その結果、次のようなことが分かった。

- ・ 甲斐国の現在人数は三十九万七千四百十六人
- ・ 調査費用は五千七百五十九円九十九銭五厘八毛
- ・ 住民一人当りの調査費は一銭四厘四毛九絲

全国一斉の調査を念頭において、その準備を進めていたといっている。

並行して杉は一八七三年に中村正直、福沢諭吉、西周、森有礼などと「明六社」を創設して、有為な人材の教育に乗り出した。適々塾で学び、水解塾の塾頭という経歴によったのであろう。杉は勝麟太郎、中村正直の二つの脈によつて福沢諭吉とも知り合った。

杉は、平民に学問をさせなければ近代化——富国強兵と殖産興業——は図れないとする点で、慶応義塾の福沢諭吉らと同じベクトルを持っていた。事実、杉が「国知学」という言葉を創作した翌年八月、福沢諭吉は『文明論之概略』の中で、

天下の形勢は一事一物に就て臆断す可きものに非ず。必ずしも広く事物の働を見て一般の実跡に顕るる所を察し、此と彼とを比較するに非ざれば真の情実を明にするに足らず。

斯の如く広く実際に就いて詮索するの法を西洋の語にて『スタチスチク』と名。

来西洋の学者は専ら此法を用ひて事物の探索に所得多しと云ふ。凡そ土地人民の多少、物価賃銭の高低、婚する者、生るる者、病に罹る者、死する者等、一々其数を記して表を作り、此彼相比較するときは、世間の事情、これを探るに由なきものも、一目して瞭然たることあり。

と、欧米列強諸国が何ゆえに列強足りうるかを解説した。ともに明六社の同志であったことを考えると、軌を一にしているのもうなづける。

三

明治十六年（一八八三）、五十五歳になった杉は統計院院長であった鳥尾小弥太（一八四八〜一九〇五）と相談の上、人材育成機関設立の上申書を政府に提出した。そこに彼は、次のように書いた。

人の命は短こうして事業は永久なり。

既に老い、日暮れて路遠ければ、学校を設立して数百名の学生を教養せん。

この中の「日暮れて路遠し」が、一種の訓語として広く知られている。明治の知識人は、みな詩人であった。

当時、成人男子の平均寿命は六十歳に満ちていなかった。遅からず数年内に戒名を得るであろうことを覚悟したに違いない。その数年を傾注して、後進を育てようというのである。

彼が育成を目指した人材とは、近代的統計学ないし、計数学の実務者だった。すでに前節で氏名のみを紹介した高橋二郎はその門下生であり、かつ国勢院の職員であって、彼は杉の教示に従ってアメリカで行われた直近の国勢調

査のありようを研究した。その中で、アメリカで行われた一八九〇年の人口調査で「ホレリス」という機械装置が使われたことを知った。

一八九〇年とは、すなわち明治二十三年であって、このとき杉は政表課を引退し学士院会員に列している。高橋は杉に相談を持ちかけ、アメリカに駐在する公使館員を使ってさらに調べることが得た。英文の技術資料を入手し、これを読んだ。

当時、ハーマン・ホレリスが開発した集計分類機械装置は人口調査用に作られ、「センサス・アカウンティング・マシン」と称されていた。そこで高橋は「人口調査電気機械」と翻訳した。

「厚紙に孔を穿ち、これを機械にかけるとたちどころに集計ができる」

という。厚紙とはパンチカードのことである。

何万、何十万の桁においても、末の数まで正確かつ迅速に集計と分類ができ、その情報は他の資料にも転用できる。このことは明治初期の有識者にはたいへんな驚きであったに違いない。ただちにその必要性を説き、併せて

——日本でも作るうではないか、と呼びかけた。

杉はすでに官界から引退していたが、高橋を支援して遂にそれを実現している。

計算機の製作は、まずカードパンチ装置から始まった。この装置は「亀の甲型手動穿孔機」（または「亀の子手動穿孔機」と呼ばれ、第一回国勢調査の以前に戸籍調査で使用された形跡がある。独立行政法人統計センターの資料には写真まで残っているのだが、誰の手によっていつ作られたものか、詳細は分からない。穿孔機である以上、紙カードにパンチを施したであろうから、当然、それを読み取って集計し、あるいは分類する計算機がなければならぬ。

おそらく一八九二年以後、通信省の技官川口市太郎が製作に着手した「川口式計算機」と呼ばれるパンチカード集計分類機械装置の実用化実験に使われたのではあるまいか。機械は試行錯誤の末、一九〇四年に完成し、翌年から実用に供された。杉が計算機による大規模な統計調査の必要性を訴えてから三十年、高橋がホレリス式統計会計機械装置を紹介してから十三年の歳月が流れていた。

杉はその後、七六年五月に正六位に叙せられ、七七年一月に権大書記官に昇格、八一年に「統計協会」を設立した。八二年十二月に勲五等雙光旭日章を受け、翌八三年に「共立統計学校」（のち開成高校）を東京・九段下に設立した。

その門下から、高橋二郎をはじめ、寺田勇吉、宇川盛三郎、呉文聰、小川為次郎、岡松徑、横山雅男など、日本に

おける統計学、経営学、経済学の基礎を築いた人材が数多く出た。

それぞれを記録しておく。

寺田勇吉は東京商法講習所教授を経て第七代校長となった。詳細な資料は一橋大学図書館にある。

宇川盛三郎は一八八四年フランスに公使館書記として留学し、そのときパリで洋画家の黒田清輝と交友があった。宇川が帰国するに際して、黒田は家族宛の手紙を託している。はじめ杉から統計を学んだが、殖産興業のため小学教育に手工業と農業の実践を取り入れるべきと考え、教育制度の充実を図った。

呉文聰ははじめ農商務省に勤め、一八七五年、杉の門下に入った。一九〇三年に著した論文「物価賃金生計度」で、賃金所得の考え方を唱えた。国勢調査の分析に近代流統計学の手法が導入されたのは、この人物によるところが大きい。

岡松徑は旗本の家に生まれ、一八七六年（明治九）太政官統計院に出仕した。のち慶應義塾大学統計学教授、陸軍省・大日本帝国陸軍教授などを務めた。

杉は一八八五年十二月に太政官が廃止されたとき、五十七歳で官界を引退した。その後も人材の育成と指導に当たった。貿易統計や各種産業統計に基づく政策の企

画・立案に参画した。一九〇二年（明治三十五）十二月に勲三等瑞宝章、一九一五年（大正四）十一月に勲二等瑞宝章を受け、一九一七年（大正六）十二月に九十歳で没した。

——すでに老い、日暮れて路遠し。

と書いたとき、杉はよもや、それから三十五年も長い時間が与えられているとは知る由もなかったであろう。死後、贈従四位。

東京豊島区の染井霊園にある彼の墓には

日本近代統計の祖 初代統計局長 杉亨一

と刻んだ自然石の碑が建っている。

補注

徳川家達 とくがわ・いえさと／1863～1940。田安家第五代当主・徳川慶頼の三男として誕生し、十四代將軍家茂の遺言で將軍職に就くべきところ、四歳の幼児だったため一橋家の慶喜が十五代將軍となった。慶応四年（一八六八）徳川宗家十六代当主となり駿河・三河七十万石の太守となった。のち公爵、貴族院議長を務めた。

安藤信正 あんどう・のぶまさ／1819～1871。岩城平藩五万石の当主。五年幕府寺社奉行、五八年若年寄、六〇年老中となり外国御用取扱、次いで老中筆頭となった。小笠原諸島の開拓、通貨改革、皇女和宮降嫁などを果たし、戊辰戦争で処罰されたがのち赦免された。

松平慶永 まつだいら・よしなが／1829～1890。田安徳川家の六男に生まれ、福井藩松平齊善の養子となった。五三年ペリー来航に際して国防策を幕府に建白し、將軍後継問題では一橋慶喜を支持した。六二年幕府政事総裁、六三年京都市守護職、六七年「四候会議」を開き、維新政府では内務事務総督、民部卿、大藏卿を歴任した。

松平容保 まつだいら・かたもり／1835～1895。美濃高須城松平義建の子として生まれ、会津藩松平容敏の養子となった。一八六〇年桜田門外の変に際して幕府と水戸藩の調停に当たり、六二年京都市守護職。六三年に薩摩藩と提携して長州藩の排撃にとめ、六八年の大政奉還で解任。明治に入ってから稲葉藩預かり、和歌山藩で謹慎を命じられたが、七六年従五位、のち正三位に叙せ

られた。

甲州人別調 なぜ、テストケースに山梨県を選んだか、その理由は次のようなものだった。①四周を山に囲まれ人口の流出と流入が少ない②江戸に近く天領の時代が長かったためにお上に柔順である③試行に最適な面積である。

スタティスチック 杉は「Statistic」の訳語「統計」は本来の意味を表していないと違和感を抱いていたといわれる。

鳥尾小弥太 とりお・こやた／1848～1905。長州藩士中村家に生まれ江川英龍に砲術を学んだ。文久三年（一八六三）奇兵隊に参加し、このとき姓を「鳥尾」に改めた。明治政府で陸軍中將のとき軍部内の抗争で統計院の院長に左遷された。のち枢密顧問官、貴族院議員となった。

亀の甲型手動穿孔機 亀の甲羅の形（扇型）をした板の下部（尻にあたる部分）に紙カードを置き、最上部（首に当たる部分）を軸とするバーの先の針を押し込んで穴を開ける仕組みだった。「亀の子型」とも呼ばれる。総務省統計局の統計博物館が現物を保存している。

川口市太郎 かわぐち・いちたろう／生没年未詳。通信省電信燈台用品製造所技師だった。筑後・久留米に生まれ、同郷の田中儀右衛門（初代久重）に師事した。

川口式計算機 電気で動作し、時計の短針、長針の原理を応用した。総務省統計局の統計博物館の説明には「入力用カードを分類機上部の挿入器に入れ、ハンドルを操作してカードを接触器に送り込むと、中にある分類針（送電針と受電針）がカードの穿孔箇所で接触し、それにより電流が通じ計盤台にある時計型の計器の長針が一目盛（一枚分）進む方式となっています。指針は長針と

短針があり、長針は一回転千枚、短針は一回転一万枚を示し一万になれば零位に戻ります。調査項目ごとの穿孔されたカードの枚数は、この計盤から読み取れるとともに、調査項目ごとに分類されたカードはそれぞれ指定のカードボックス（分類柵）に収められる仕組みになっています」とある。

共立統計学校 開成高校の前身。

日本IT書紀 025 太政官政表課

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。